

東アジア子ども学

交流プログラム

報告書

2009



East Asia Child Science
Exchange Program



本プログラム創設者、日本代表 小林 登 (東アジア子ども学交流プログラム日本代表、CRN所長)



Kobayashi Noboru ●医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。1927年東京生まれ。1954年東京大学医学部卒業。国際小児科学会会長、国立小児病院医療センター初代センター長、国立小児病院院長などを歴任。現在は、チャイルド・リサーチ・ネット (http://www.crn.jp) 所長、ベネッセ世代育成研究所所長、子どもの虹情報研修センター・センター長、日本子ども学会代表などを務める。

東アジア子ども学交流プログラム・2009年度報告書を出版するにあたり、代表として、ひと言挨拶を述べる。

2009年度は、東アジア交流プログラムの会議を東京と上海で2回開くことができ、実り多き年であった。お茶の水女子大学で9月12日(土)、13日(日)に開かれた日本子ども学会の学術集会である第6回「子ども学会議」の前日に、東アジア子ども学交流プログラムの第4回会議が開かれた。また、5月に上海で開かれる予定の会議が、新型インフルエンザ流行のため延期となり、11月2日(月)、3日(火)に第5回の会議として上海で開催された。いずれも成功裡に終えることができた。

第4回のメインテーマは「言葉の発達と脳科学」で、日・中・韓の言葉の発達の共同研究会

議と合わせて開催されたため、韓国の研究者も初めて参加し、正に「東アジア」の会議となった。

第5回のメインテーマは「情動の子ども学」という興味深いものであり、反響もよかったが、残念ながら、従来通りの日・中の研究者のみによる会議となった。今後の交流プログラムでは、韓国側にも参加を続けて頂き、正に「東アジア」として発展させたいものである。

"Children at risk, whenever and wherever." という考え方がありますが、東アジアの中国も、韓国も、そして日本も、現在子どもたちの当面する問題の中心は心理・行動的なものであり、その要因は単一ではなく、社会的な要因も加わって複合的である。その昔、子どもたちの問題の中心が、感染症や栄養失調のようなものであった時代は、病原菌あるいは栄養素という単一

の原因によってそれらは起こっていたが、現在の問題はそうのように単純に割り切れない。だからこそ、「子ども学」「Child Science」というような学際的な立場、包括的な立場が必要なのである。第4回の東アジア子ども学交流プログラムの会議が、第6回「子ども学会議」の前日に開かれたことは、外国からおいでになった方々に、私たちのやっている「子ども学」というものを考えていただける良い機会であったと思われる。

東アジア子ども学交流プログラムは、東アジアのそれぞれ文化の異なる国々の研究者が、学際的、包括的な「子ども学」の立場で、問題解決に必要な情報を交換し、それを発展させる場である。この報告書が、その情報提供の役を少しでも果たせることを願いたい。

中国代表 朱家雄

(東アジア子ども学交流プログラム中国代表、華東師範大学教授)



Zhu Jiaxiong ● 華東師範大学教授。学前教育研究所所長。中国学前教育研究会副理事長。上海市幼児教育研究会副会長兼秘書長。中国教育部の国家プロジェクトである「学前教育学科養成目標・基準とカリキュラムの研究および実践」、「幼児教育改革実験研究」などを担当する。

東アジア子ども学交流プログラムを2009年度も日本と中国で2回開催することができ、誠に嬉しく思います。

東アジア子ども学交流プログラムは、東京大学名誉教授であり、日本国立小児病院名誉院長、CERN所長でもある著名な小児科医の小林登先生の主導で創設され、中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議等の協賛を受け、(株)ベネッセコーポレーションの支援によって運営されております。

その主旨は、育児、保育、幼児教育等に関わる仕事と研究に従事している東アジア各国の大学と大学教授の相互訪問や交換講義を通じて「子ども学」の普及とグローバル化を実現し、子どもに関する各種の問題を解決し、子どもの生活環境を改善して、すばらしい未来を創るために貢献することにあります。私はこのプログラムの中国側責任者を拝命しましたことを誠に

光栄に存じております。

私は、小林登先生が提唱していらつしやる「子ども学」の主張に心より賛同いたします。小林登先生との数多い交流および、5回の東アジア子ども学交流プログラム活動を含む、さまざまな学術活動へ参加する中で、医学、小児科学、脳科学、心理学、教育学、社会学、人類学、法学、工学、建築学等の自然科学・社会科学・人文科学が有機的に結びついてはじめて、子どもが直面する各種の問題を総合的に探求し、解決できるものであると、深く会得致しました。

東アジア子ども学交流プログラムの活動を組織し、それに参加する過程において、中日両国の、子どもに関するさまざまな学術分野の専門家が一堂に会し、互いに切磋琢磨し、相互に協議するという光景を目にいたしました。両国トップの専門家が学術的な相互の働きかけにより新しい思考をほとぼしらせ、新たな戦略と方策を生み出すことができるということを、私は

肌で感じ、感銘を受けたのです。

東アジア子ども学交流プログラムのこれまでの5回の活動では、「子ども学の意味」「異文化の比較研究」「子どもにやさしいチャイルドケアリング・デザイン」を、「言葉の発達と脳科学」および「情動の子ども学」のテーマが議題となりました。中日両国の子ども研究に関する理論と実践に携わる者による熱い討論は、学術的発展を促進したばかりでなく、中日両国の交流と友情を増進させました。

私は、東アジア子ども学交流プログラムがこれまでの経験を総括した上に、さらに大きい収穫を得ることができるように切に望んでおります。我々が力を合わせて協力し、これまでと変わることなく、絶え間なく努力すれば、我々はきっと今よりもいっそうの成功を収めることができる、確信しております。

(発表順)

小泉英明

Koizumi Hideaki



理学博士。株式会社日立製作所役員待遇フェロ、独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター「脳科学と社会」研究開発領域総括。専門は分析科学・応用脳科学・環境科学。1971年東京大学教養学部基礎科学科卒業。日立製作所基礎研究所所長、同研究開発本部技師長を経て、2004年から現職。

姜勇

Jiang Yong



教育学博士。華東師範大学副教授。専門は教師教育、子どもの発達・教育基本理論、比較教育。1973年生まれ、北京师范大学教育学院で博士号取得。中国福利会幼稚園の勤務を経て現職。

張明紅

Zhang Minghong



華東師範大学副教授。専門は就学前の子どもの言語教育、0-3才児の発達と教育、就学前の子どもの社会教育など。中国学前教育研究会幼稚園課程および教学專業委員会委員、国家教育科学「第10次五カ年計画」のテーマである「0-3歳児の早期ケアと発達」専門家メンバー。

内田伸子

Uchida Nobuko



学術博士。第20期日本水術会議会員。お茶の水女子大学教授。専門分野は発達心理学・認知心理学。1946年群馬県生まれ。1968年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1970年同大学院人文科学研究所修了。1998年同大学院人間文化研究科教授。日本発達心理学会常任理事、日本教育心理学会常任理事。

李基淑

Lee Ki Sook



教育学博士。梨花女子大学教授、梨花女子大学付属・梨花子ども研究院院長。梨花女子大学幼児教育学科を卒業し、アメリカ George Peabody College For Teachers で修士および博士学位を取得。韓国幼児教育学会会長、世界幼児教育機構 (OMEPI) 韓国会長を歴任し、現在環太平洋幼児教育学会 (PACERA) 韓国会長を務める。幼児教育カリキュラムと教育プログラムに関する著書多数。

周念麗

Zhou Nianli



心理学博士。華東師範大学副教授。専門分野は発達心理学、親子関係、統合保育。1995年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1998年東京大学大学院教育学修士号、2003年中国華東師範大学心理学博士学位取得。2004年、米國 Arizona State University 客員研究員として乳幼児の情緒発達研究を行った。2006年5月-2007年3月、国際交流基金フェローとして、名古屋大学で統合保育について研究した。現在、華東師範大学就学前教育学部心理研究室主任。

榊原洋一

Sakakihara Yoichi



医学博士。お茶の水女子大学教授。日本子ども学会副代表。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒業。東京大学小児科講師を経て、現職。

渡辺富夫

Watanabe Tomio



工学博士。岡山県立大学情報工学部情報システム工学科教授、情報工学部部長・研究科長。1983年東京大学大学院工学系研究科産業機械工学専攻博士課程修士。山形大学工学部情報工学科助手、同大学専任講師、助教授、1992-1993年米國ブラウン大学客員研究員、1993年岡山県立大学情報工学部情報システム工学科教授を経て、現職。

山本登志哉

Yamamoto Toshiya



教育学博士。早稲田大学教授。子どもとお金研究会代表。日本質的心理学会理事・編集委員。法と心理学会常任理事・編集委員長。1959年青森県生まれ。呉服屋の丁稚を経て京都大学文学部・同大学院で心理学専攻。奈良女子大学在職時に文部省長期在外研究員として北京師範大学に滞在。

沈月華

Shen Yuehua



中国福利会国際和平婦幼保健院主任医師、上海第二医科大学教授。中華周産期学会全国委員、上海産期学会顧問、上海小児科学会新生児学顧問。専門分野は周産期保健、優生優育指導、乳幼児健康教育。1967年上海第二医科大学を卒業し、臨床医学に長年従事。1980年から新生児・周産期保健優生優育諮問に従事。1989-1990年、日本北里大医学病院NICUで研修し、第1回国際周産期学会に出席。

華愛華

Hua Aihua



華東師範大学就学前教育学部部長、中国就学前教育会理事、遊びとおもちゃ専門委員会主任、中国陶行知研究会就学前専門委員会主任。専門分野は就学前基本理論、0-3歳児の早期教育指導、就学前の子どもの遊び。担当する研究プロジェクト・幼稚園の遊びに関するカリキュラムの研究、教師が提供する素材と幼児の遊び行動との相關関係研究、0-3歳児の早期ケアと発達に関する研究、幼稚園教材研究制度の研究など。

谷村雅子

Tanimura Masako



医学博士。国立成育医療センター研究所成育社会医学研究部部長。1972年、日本女子大学家政学専攻卒業。東京医科歯科大学人類遺伝学教室助手、米國テキサス大学遺伝学センター研究員を経て、1987年より現研究所（旧国立小児病院小児医療研究センター）にて、環境と遺伝の両面から小児の健康・発達を研究。特に、メディアの影響、児童虐待、小児がん、遺伝性腫瘍など。日本小児科学会子どもの生活環境改善委員会委員。

000	巻頭言
002	講演者プロフィール

005 第1章 ● 言葉の発達と脳科学 ～東アジアでの研究と実践～ (日本・東京にて)

006	① 外国語としての第2言語の習得と脳科学	小泉英明
010	② 『早期閱讀』を基盤に、幼稚園カリキュラムについて	朱家雄
014	③ 上海市幼稚園教諭の文化的状況についての調査	姜勇
019	④ 中国の幼稚園における『早期閱讀』のデザインと実施	張明紅
022	⑤ シンポジウム・幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響～日・韓・中比較～	
029	⑥ 質疑応答	

031 第2章 ● 情動の子ども学 (中国・上海にて)

032	① 何故人間は心をもったのだろうか、脳の三位一体学説から情動の役割を考える	小林登
037	② 中国における幼児メンタルヘルス教育の実践と研究	朱家雄
042	③ 人を引き込む身体的コミュニケーション技術	渡辺富夫
046	④ 所有に関する行動の日中文化比較…子どもはいつ「中国人」になるのか?	山本登志哉
051	⑤ ベビーマッサージとアタッチメントについての研究	沈月華
057	⑥ 親の期待と幼児の発達について—中国11都市3000名の幼児の調査結果	周念麗
062	⑦ 教育的視野の中の子どもの遊戯	華愛華
065	⑧ 赤ちゃんはヒトに興味をもつ—赤ちゃんの対テレビ行動の解析より	谷村雅子
069	⑨ 日本グッド・トイ展示会の紹介	
070	⑩ 会場の声	

072 ※付録：「子ども学」関連語一覧(日・中・英対照)